様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３９７

研究課題名（和文）世紀末前夜の王都ミュンヘンと森鴎外　―日独比較文学・文化論の見地から

研究課題名（英文）Mori Ogai and the royal capital Munich

研究代表者
美留町　義雄（Birumachi, Yoshio）

大東文化大学・文学部・准教授

研究者番号：４０３１７６４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、森鴎外のミュンヘン滞在をテーマとし、１９世紀末の芸術都市ミュンヘンにおける生が、鴎外とその文学に与えた影響を検証している。
　2013年度は、成果を論文にまとめる作業を行った。鴎外を圧倒した「古典芸術と美術学校」、彼が足繁く通った「カフェ・ミネルヴァ」、そして『うたかたの記』で重要な役割を果たす「シュタルンベルク湖」という三つのテーマに焦点を合わせ、これまでの鴎外研究では参照されなかった多数の独語文献を参考に、「『うたかたの記』とドイツ美術界の動向について　―ミュンヘン画壇の消息より」という論考にまとめた。なお、この論文は学会誌『日本近代文学』第90集に掲載される。

研究成果の概要（英文）：Utakata no ki by Mori Ogai and Trends in the German Art World, with Special Reference to the Painters of Munich. (Title) When Ogai was in Munich, the Modernist Art Movement was just erupting, and the existing structure of the art world, dominated by the Academy, was losing its hold. A clear understanding of these circumstances surrounding the young Ogai prompts the observation that the characters in Utakata no ki are trying to remove themselves from the Academy. Those characters all head off to Lake Starnberg. In fact, young painters in search of new forms of expression did gather in that very area. This article re-examines the story in the context of these artistic and cultural developments.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：森鴎外　ミュンヘン　日独比較文学　ドイツ美術界　エキステル

１．研究開始当初の背景

ドイツ留学時代の森鷗外、特にベルリンと彼の関わりは、従来、主に『舞姫』研究を通じて分析されてきた。これまで申請者も、鷗外のドイツ留学を研究テーマに据え、帝国の首都として再開発が進むベルリンにおける鷗外の都市体験を調査した。その成果は著書『鷗外のベルリン』に公表されている。

しかし、鷗外のドイツ体験全般を考慮した場合、彼のベルリン滞在のみを扱うことは、実相の片面だけを捉えることになる。なぜなら当時のドイツは、形式こそ「ドイツ帝国」として統合されていたものの、各州は独自の主権を確保して分立し、特にミュンヘンを中心とする南ドイツは、バイエルン王国としての形態を維持した自治国家として存在していたからである。その気質や文化は、ベルリンを首府とするプロイセンとは全く異質なものであり、鷗外自身、『独逸日記』等のテクストの中で、バイエルンの特異性について数度言及している。まさにこの点から、従来の鷗外研究を補完するためにも、彼のミュンヘン滞在を主題化する必要性が生じたのである。

２．研究の目的

本研究は、ドイツ留学時代の森鷗外、特にこれまで扱われる機会が少なかった、彼のミュンヘン滞在期に焦点を当て、この都市と彼の関わりを、『うたかたの記』等の文学作品や『独逸日記』等の実生活上のテクストを題材にして検証する。その際さらに、ドイツ文学やドイツ美術、広く読まれた新聞や雑誌、さらには都市史から旅行案内書に至るまで、ミュンヘン関連の諸文献を比較の対象に加え、留学生鷗外を取り巻いていた都市環境を多方面から再構成する。その作業を通じて、伝統と近代がせめぎ合うバイエルンの王都における生のあり方を、文化・美術史的側面から解明すると同時に、鷗外のテクストにおいてその影響関係を論証する。

３．研究の方法

（１）ベルリンからミュンヘンへ赴いた森鷗外を取り巻く文化的相違を検証するため、バイエルン王国とその首府を歴史・文化的に調査する。特に、初年度は、「第二のアテネ」を目指した 19 世紀前半におけるミュンヘンの都市改造計画に焦点を当て、鷗外がこの古典芸術の都をどのように受容したのか、『独逸日記』をはじめとする彼の諸テクストから探って行く。さらに、ミュンヘン時代の友人、画学生原田直二郎との交際にも注目し、原田が学んだミュンヘン王立造形芸術学院の伝統と歴史について調べる。

（２）研究休暇を取得してミュンヘンに滞在し、上記の都市像ならびに建造物を実地で調査すると同時に、ミュンヘン大学図書館およびバイエルン州立図書館、ミュンヘン市立文書館において、鷗外滞在時のミュンヘンの資料を複写・収集する。また、それらをコンピューターへ項目別に入力して研究のデータ・ベースを作成する。さらに、ベルリンの鷗外記念館にて執り行われる鷗外生誕 150 周年のシンポジウムに赴き、ドイツの研究者達と交流を深め、当地における森鷗外研究の現状を把握する。

（３）過剰に演出された王都の古典美に対抗する形で、「分離派」をはじめとするモダニズム芸術が成立した美術史上の経緯を検証し、その文脈において『うたかたの記』を改めて捉え直す。その際、ヒロインのマリイと狂王ルートヴィッヒがともにに入水する筋書きに注目し、その凋落のプロセスに、王権と芸術が密に結びついていた 19 世紀的なルートヴィッヒの時代の終焉を論究して行く。また一方、物語の舞台ともなったシュタルンベルク湖一帯が、19 世紀後半より新派の芸術家達が集まってコロニーを形成した場所であり、ドイツのモダニズム芸術史上重要な役割を果たした点に論及し、『うたかたの記』との関連を分析する。

４．研究成果

（2011 年度）研究初年度に当たるこの年は、基礎研究として、都市ミュンヘンの歴史と文化を調査した。歴史・文化・政治などさまざまな分野の独語の文献を取り寄せ、特に鷗外が滞在していた 19 世紀後半のバイエルン王国と首府ミュンヘンの史的背景を学んだ。その際明らかとなったのは、ベルリンを首府とするプロイセンとの対立関係である。ホーエンツォレルン家が支配する軍事国家プロイセンが、徹底した官僚主義で北ドイツに勢力を伸ばす一方で、バイエルンのヴィッテルスバッハ王家は、芸術を愛するルートヴィッヒ二世のもとで、メセナ政策を推し進め、伝統的に保守主義が支配的な南ドイツにおいて長く君臨した。本研究では、鷗外留学時のこうした両国の関係を対照的に検証しながら、ミュンヘンに移った鷗外の周辺事情を、まず歴史・社会的に明らかにした。

加えて、当時の風俗や実生活を知るために、雑誌や民衆史の文献を古書にて購入し、一般市民の日常について調べた。彼が実見した街並み、知り合った人々、滞在した住環境、劇場や美術館の様子を探った。特筆すべきは、彼が学んだ学校や頻繁に訪れた喫茶店、店舗などの画像資料が数多く見つかった点である。そのうちいくつかは下記の諸論文に掲載した。これは本邦では未公開の写真なだけに、専門家の注目を集めている。

なお、上記の作業では、多岐にわたる文献を、スキャナーを利用してコンピューターに取り込み、それらを整理しながら本研究のデータ・ベースを作成した。

（2012 年度）勤務校の長期海外研修制度を活用して、一年間ミュンヘンに留学した。前年度の研究を踏まえ、鷗外が芸術都市ミュンヘンにおいて、とりわけ西洋美術に関する知見を深めた点に注目し、彼のミュンヘン滞在を現地で調査した。その結果、以下の諸事実が明らかとなった。①1886 年当時、発展・拡大し続けるミュンヘンには、中欧という地理上の利点も相俟って、欧州各国からさまざまな階級の人間が流入していた。特に『うたかたの記』の「カフェ・ミネルヴァ」に現れているように、カフェという場が彼らの自由闊達な交際に極めて重要な役割を果たしていた。②ベルリンでは主に軍関係の人間とのみ交際していた鷗外が、南独の陽気かつ開放的な空気の中で、積極的に上記のボヘミアン、特に、芸術アカデミーの学生たちと親しく交流し、その私的な交際の模様を彼の文学作品につぶさに反映させている。③鷗外がミュンヘン市内のみならず、郊外の湖沼地帯へ頻繁に足を伸ばし、バイエルンの風土や地方生活の様子をつぶさに観察して書き記している。とりわけ、何度も足を運んだシュタルンベルク湖は、新進の芸術家達が集うコロニーでもあり、当地で彼がモダニズム運動の一端に触れた可能性がある。

上記の成果は、所属先であるルートヴィッヒ・マクシミリアン大学日本センター主催の講演会「学会発表③」において口頭発表した。さらに、同センター教授の E.シュルツ氏と共同し，バイエルン州立民族学博物館主催の講演会「学会発表②」でも口頭発表を行った。なお、どちらも使用言語はドイツ語である。

（2013 年度）過去二年間の成果を、『うたかたの記』論にまとめる作業をおこなった。まず、これまで脇役として等閑視されていた若き画学生エクスターに注目し、実在したこの画家が、鷗外と知り合った時期に官学派のスタイルから脱却し、モダニズム運動に足を踏み込んでいた点をテクストとの関連で論証した。次に、小説中の画学生たちの生態に焦点をあて、カフェに集う彼らの姿や会話の中に、従来の官学派の絵画に反抗するドイツのモダニズム運動の萌芽を読み取った。特に、シュヴァービングと呼ばれる美術学校付近のカフェは、絵画だけではなくミュンヘン世紀末芸術一般において重要な役割を果たした点を論究し、F．ヴェーデキント等この場に集ったドイツ文学者達にも言及しつつ、ジャンルを超えたアーティスト達のカフェにおける交流について論じた。最後に、主人公達がシュタルンベルク湖に赴くことに注目

し、これまで「狂王」ルートヴィッヒの関連において理解されてきたこの行動のうちに、古典主義的な王都を離れて前衛に向かうミュンヘン画壇の動向を検証した。この論文を、学会誌『日本近代文学』に投稿したところ、「『うたかたの記』注釈として過去にない成果を含む」、さらに「作家論的な面でも鷗外のミュンヘン体験、ならびに帰国後の美術活動に関わる新たな事実を報告している」と評価され、掲載を許可された。なお、この成果は、二度の学会発表（③④）において、口頭でも発信されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①美留町義雄、『うたかたの記』とドイツ美術界の動向について―ミュンヘン画壇の消息より―、日本近代文学会編『日本近代文学』、査読有、第 90 集、2014 年、17-31 頁
②美留町義雄、森鷗外『うたかたの記』におけるロマン主義の実相―「女神バワリア」の系譜をめぐって、日本比較文学会編『比較文学』、査読有、第 54 巻、2012 年、52-67 頁
③Yoshio BIRUMACHI, Unter der Erde der Kaiserstadt. Mori Ōgai und Berlin. In: R. Maeda(Hrsg.): *Transkulturalität. Identitäten in neuem Licht.* 査読無 München (Iudicium) 2012, S.728-733.

〔学会発表〕（計５件）
①美留町義雄、学生街の喫茶店―森鷗外『うたかたの記』のカフェ・ミネルヴァについて―〔日本独文学会関東支部研究発表会（2013 年 11 月 9 日　於信州大学)〕
②美留町義雄、ミュンヘンの森鷗外―メイドカフェ、オクトーバーフェストそして『うたかたの記』―
〔学習院大学人文科学研究所講演会（2013 年 6 月 17 日　於学習院大学)〕
③Yoshio BIRUMACHI, Mori Ōgai in München. Sein Alltag und seine Dichtung in Deutschland vor 130 Jahren.
〔Forum für Sprache und Gesellschaft Japans. (31. Aug. 2012. Ludwig-Maximilians Universität München)〕
④Yoshio BIRUMACHI, Mori Ōgai in München und Berlin.
〔 Der ethnologische Salon. Eine Veranstaltungsreihe des staatlichen Museums für Völkerkunde München (27. April 2012)〕
⑤Yoshio BIRUMACHI, Von der Bavaria zur Lorelei ― Über nationalistisch-romantische Momente im Roman *Wellenschaum* (Utakata no ki) von Mori Ōgai, 〔日独修好150周年記念国際コロキウム Geschichte und Zukunft der japanisch-deutschen Kulturbeziehungen und interkulturelles Verstehen（2011年9月17日 於立教大学)〕

６．研究組織
(1)研究代表者
美留町　義雄（BIRUMACHI, Yoshio）
大東文化大学・文学部・准教授
研究者番号：40317649

(2)研究分担者　なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　なし
（　　）

研究者番号：